

臨床心理学領域における地域循環型教育 —出前講座を活用した試行的取り組みに関する実践報告—

田中圭介*・宮下敏恵*

(平成29年8月23日受付；平成29年11月24日受理)

要 旨

循環型教育とは、教授者と学習者の相互に学び合うこと目指すものである。臨床心理学を学ぶ大学院生にとっても、学校現場において児童生徒と関わりを持つ機会を得ることは、循環型教育の観点から重要な体験となることが期待される。加えて、近年では、スクールカウンセラーが児童生徒に対して心理教育を実施することが強く求められている。したがって、本研究では、上越教育大学大学院の臨床心理学コースの大学院生を対象に、出前講座の機会を利用した循環型教育の試行的な取り組みを実施し、その効果を検討した。23名の学生が心理教育プログラムを作成する演習に参加した。そのうち、4名は、中学校での出前講座に帯同し、認知再構成法のグループワークに手伝い役として参加した。加えて、2名の学生は出前講座のみに参加した。出前講座後に実施したアンケート調査の結果、参加者のうち70%の学生は、演習や出前講座での体験や学びに対して肯定的印象を報告した。出前講座に帯同し、実際に中学生との関わりを持った学生は、出前講座に参加しなかった学生よりも、肯定的印象を報告した者の割合が多かった。これらの結果を受けて、臨床心理学教育における循環型教育について議論された。

KEY WORDS

循環型教育, 臨床心理学, 心理教育, スクールカウンセリング

1 問題

近年、心の専門家に対する社会的ニーズが高まっており、このことは平成29年に控えた公認心理師法施行の動向からも強く伺える。上越教育大学臨床心理学コースでは、学部及び大学院の段階において、臨床心理学の知識を備えた教員及び臨床心理の専門家の養成を目指し、教育を行っている。特に、大学院では財団法人日本臨床心理士資格認定協会の第1種認定校として臨床心理士の養成を行っている。上越教育大学臨床心理学コースでは、臨床心理学に関する実践的知識や技能を指導するために、インテーク報告会、ケースカンファレンス、心理教育相談室での臨床実習、学外実習等がカリキュラムとして提供されている。現状でも十分な実習機会が提供されていると思われるが、座学的な知識をより実践的な知識や技能として昇華させていくためには、支援対象者との直接的な関わりを持つ機会をより多く確保することが求められる。その一方で、臨床心理学的支援の特質上、対象者の個人情報保護、対象者への影響、学外の協力機関にかかる負担など、実習を行うために考慮すべき事項が多く存在し、実習機会を確保することは、本学のみならず、日本の臨床心理学教育における大きな課題であるといえる。そこで、本研究は、地域循環型教育の考えを踏まえつつ、中学生や高校生を対象として開講されている出前講座を大学院生の体験学習の機会として活用し、その学習効果を検討することを目的とするものである。

宮崎(2015 pp127)によれば、循環型教育とは、あらゆる時期・機会もしくはあらゆる人々の間で、教育を受ける人と教育を受け人の双方が学び合い、その学びが互いに循環することである。循環型教育では、教授者は既存知識を他人に教える過程で、自らの理解を深めたり、学習内容を客観的に整理することができる。一方で、受け手は、教授内容を知識として取り込むことができる。また、受け手から教授者に対して、教授者とは異なる視点から斬新な発想や新鮮な感覚を提供することで、双方向での学習効果が期待できる。宮崎(2015)は、高等教育における循環型教育の例として、「熟議2011 in 三重大学 対話と協働～未来に向けて～」の取り組みを取り挙げている⁽¹⁾。この取り組みでは、企業、NPO、保護者、市民、内外の日本人・留学生等が集まり、特定の課題について学習、熟慮、討議することを目的とした企画であり、そのテーマ設定や準備、ファシリテーター等を受講生が授業の一環として行うものである。三重大学の調査では、熟議を活用した授業実践は、授業に対する満足度、有用性に関して受講生から高い授業評価を得たことが報告されている⁽¹⁾。同様に、医療ソーシャルワーカーの養成や看護師養成の課程において、大学

*臨床・健康教育学系

と地域や医療現場との連携を意識した循環型教育の取り組みが報告されているが⁽²⁾ ⁽³⁾, 臨床心理学教育における実践例は少ない。心理学領域での循環型教育の実践例として, 明治学院大学心理学部での取り組み⁽⁴⁾ が挙げられる。明治学院大学心理学部では, ゲストスピーカーによる講演やグループでの議論や研究活動を行う基幹科目「心理学支援論」と心理的支援に関連した現場での「体験活動」の2つの取り組みを中心とした教育プログラムを導入している。明治学院大学心理学部での取り組みは, 学部4年間のカリキュラムの中で, 座学を実践的な学びへと結びつけることを目指した試みといえる。一方で, 学生の授業での学びと体験との連動性は個々の学生で大きく異なることも今後の課題として指摘されている⁽⁴⁾。先に述べたように, 臨床心理学的支援を学ぶための体験学習の確保には多くの課題がある。しかし, 地域福祉や学校現場でのサブクリニカル(診断閾値下)のニーズへと対象を拡げることで, 臨床心理学教育においても地域循環型教育の枠組みを活用することが可能であると考えられる。

以上のことから, 本研究では, 大学院生を対象に, 「ストレス・マネジメントに関する心理教育」を学習テーマとして, 心理教育資料作成のためのグループ活動を講義時間内で行せるとともに, 中学生, 保護者, 及び教師を対象にした出前講座の機会を, 作成された心理教育の試行, 及び体験学習の場として提供した。本研究では, 出前講座実施後のアンケート調査の結果を分析し, この試行的な取り組みの教育的な効果について予備的に検証した。講義による知識獲得, 資料作成による知識の精緻化, 出前講座への参加による体験学習を連動して行うことにより, 学生は, 子どもや保護者との実際の関わりの中で, ストレス・マネジメントに関する理論や実践方法への理解をより深めることができると期待される。

2 方法

2. 1 調査対象者

調査対象者は, 臨床心理学を専攻する大学院1年生23名(男性6名, 女性17名)及び大学院2年生(男性1名, 女性1名)であった。

2. 2 研究デザイン

臨床心理学コースの大学院1年次の必修科目の時間を活用し, 研究を実施した。受講生である大学院1年生23名のうち, 講義受講後に出前講座に補助として参加した4名を「講義と出前講座」群とした。出前講座に参加しなかった残りの受講生は19名であり, そのうち質問紙への回答の得られなかった2名を除いた17名を「講義のみ」群とした。加えて, 出前講座のみに参加した大学院2年生2名を「出前講座のみ」群とした。

2. 3 手続き

まず, 1回目の講義で, 受講生(大学院1年生23名のみ)を対象に, 出前講座を活用した授業を行うことに関する企画趣旨の説明を行った。説明には, (1)授業時間を利用して, 中学生を対象にしたストレス・マネジメントに関する講義資料をグループで作成し発表すること, (2)発表後に投票を行い, 投票で最も高い点数を取得した資料を教員が適宜修正し, 実際に出前講座で使用する事, (3)希望者は教員の出前講座に帯同し, 補佐をすることが含まれた。その後, 「認知再構成法を活用したストレス・マネジメント心理教育」に関する講義及び資料作成上の注意点について, 1時間程度の講義を行った。なお, 受講生は全て, 当該授業以前に, 認知行動療法に関する授業単位を取得している者であった。受講生には, 参考資料として下山・屋嘉比・西村・平林・林(2009)の『子どものための認知行動療法プログラムの開発研究』⁽⁵⁾を呈示し, 出前講座では, 心理教育を行った後, 同プログラムから「前向き探しゲーム」を実施する旨を伝えた。2回目, 3回目の授業では, 受講生は5つのグループに分かれ, 各グループで資料の作成に取り組んだ。4回目の授業で, グループ毎に作成した資料を用いて発表を行い, 「理論の正確さ」や「わかりやすさ」, 「工夫」の観点から投票を行った。投票の結果を受けて, 出前講座で活用する資料を決定した後, 全体の講評を行った。その2週間後に, 教員は, 授業で作成された資料を用いてA市B中学校で出前講座を実施した。実施後, 受講生へのフィードバックを行い, 無記名式質問紙への回答を任意で求めた。

2. 4 出前講座の概要

A市B中学校での学校保健委員会の機会を利用して行った。講座には, 中学2年生49名, および学校医, 教師, PTA役員が参加した。60分間の出前講座は, (1)心理教育(35分間), (2)前向き探しゲーム(20分間), (3)まとめ(5分間)で構成された。心理教育は, 学生が授業内で作成した資料を推敲したものをを用いて著者によって実施され

た。心理教育の内容には、ストレスの定義、ストレスの発生メカニズム、認知再構成法の紹介とエクササイズが含まれた。前向き探しゲームとは、あるお題（例えば、『Lineを無視された。嫌われているのかもしれない』）に対して、別な見方や前向きな考え方を提案することを目的としたグループワークである。前向き探しゲームには、教師やPTA役員も生徒の考えの正否を判断するリーダー役として参加した。出前講座への帯同を希望した大学院生は、エクササイズ時の支援や、前向き探しゲームのリーダー役及び保護者の支援などを担当した。

2. 5 質問紙

質問紙は、本研究のために独自に作成した質問項目を使用した。質問項目は、(1)授業内容及び出前講座での経験に満足しましたか（以下、満足項目）、(2)授業や出前講座を通して、学習内容に関する理解は深まりましたか（以下、理解項目）、(3)授業や出前講座を通して、実践に役立つ知識や技術は得られましたか（以下、知識・技術項目）、(4)感想（自由記述）で構成された。(1)～(3)の質問項目については、「1 全くそう思わない」～「7 とてもよく思う」の7件法で回答を求めた。

3 結果と考察

講義のみ群、出前講座のみ群、講義と出前講座群のそれぞれの群について、7件法に対する回答者の人数の割合をFigure 1からFigure 3に示した。満足項目について、講義のみ群では、17名中4名（23.5%）が「ほとんどそう思わない」、あるいは「どちらかといえばそう思わない」と回答していたのに対し、17名中13名（76.5%）は「どちらかといえばそう思う」、あるいは「かなりそう思う」と回答していた。出前講座のみ群（2名）、講義と出前講座群（4名）では、いずれの群においても全ての回答者が「どちらかといえばそう思う」、あるいは「かなりそう思う」と回答していた。加えて、満足項目について、講義のみ群と講義と出前講座群を合わせた受講生21名のうち、「どちらかといえばそう思う」、あるいは「かなりそう思う」の回答をした者の割合は、81.0%であった。

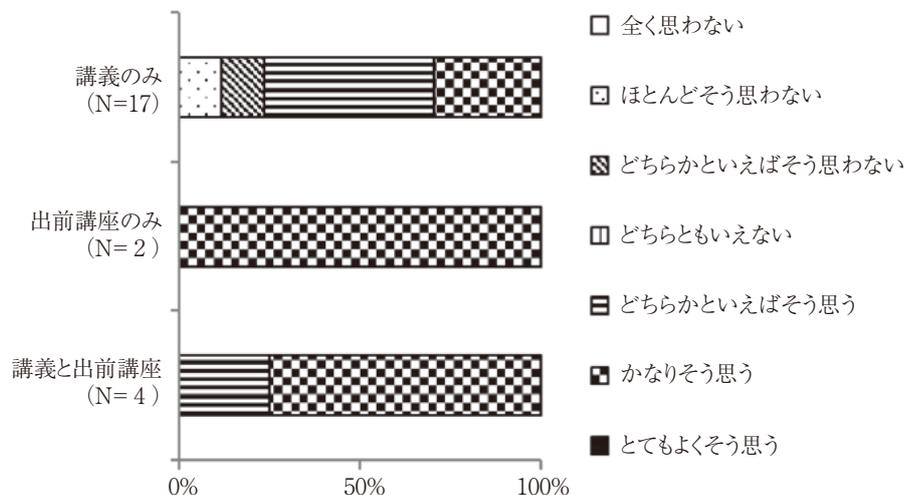


Figure 1 満足項目に関する回答者の割合

理解項目について、講義のみ群では、17名中2名（11.8%）が「ほとんどそう思わない」と回答していたのに対し、17名中3名（17.6%）が「どちらともいえない」、17名中12名（70.6%）が「どちらかといえばそう思う」、あるいは「かなりそう思う」と回答していた。出前講座のみ群（2名）、講義と出前講座群（4名）では、いずれの群においても全ての回答者が「かなりそう思う」と回答していた。加えて、理解項目について、講義のみ群と講義と出前講座群を合わせた受講生21名のうち、「どちらかといえばそう思う」、あるいは「かなりそう思う」の回答をした者の割合は、76.2%であった。

知識・技術項目について、講義のみ群では、17名中2名（11.8%）が「ほとんどそう思わない」と回答していたのに対し、17名中1名（5.9%）が「どちらともいえない」、17名中14名（82.4%）は、「どちらかといえばそう思う」、あるいは「かなりそう思う」と回答していた。出前講座のみ群（2名）、講義と出前講座群（4名）では、いずれの

群においても全ての回答者が「かなりそう思う」と回答していた。加えて、知識・技術項目について、講義のみ群と講義と出前講座群を合わせた受講生21名のうち、「どちらかといえばそう思う」、あるいは「かなりそう思う」の回答をした者の割合は、82.4%であった。

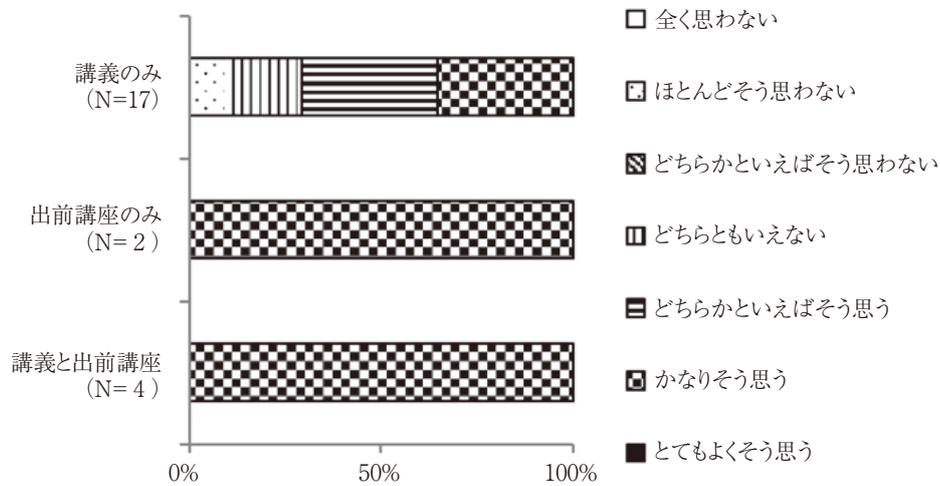


Figure 2 理解項目に関する回答者の割合

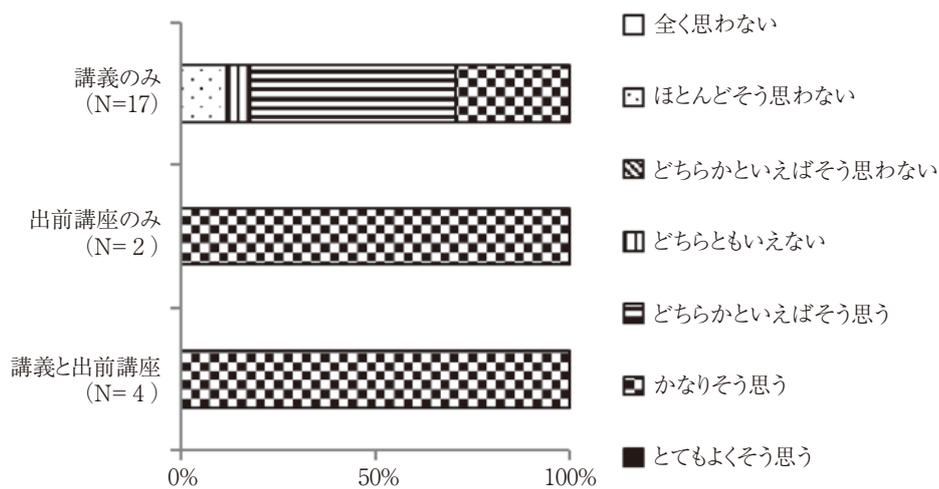


Figure 3 知識・技術項目に関する回答者の割合

以上の結果から、講義や出前講座への参加形態に関わらず、70%以上の参加者から肯定的評価が得られた。さらに、出前講座に参加し実際に生徒との接点を持った者は、講義のみを受講した者よりも、満足度、授業理解度、実践的知識や技術の獲得度のいずれの項目に関しても、肯定的に評価する割合が多かった。加えて、また、出前講座のみ群の大学院2年生もまた、講義及び出前講座に参加した大学院1年生と同等に、出前講座での経験を肯定的に評価していた。大学院2年生は、既に座学的知識や実習経験の蓄積があったため、出前講座単独でも十分な経験を得られたためであると考えられる。

次に、自由記述の結果を整理し、Table 1, Table 2に示した。講義のみ群 (Table 1) では、“スライドを作成する際、ストレスや認知再構成法など改めて自分で学び、今まで知識を得るだけだったのを、発信という形に変えることがとても難しく、考えていくことでより自分の学びに繋がったと思います。”、“心理教育に特化した授業を受けたことがなかったので、生徒にとってどうやったら面白く（心を掴むような）分かりやすい授業を作れるか考えて、スライドや授業計画を作成すること、そして生徒の視点に立って他の発表者の授業を見て評価することで、必要な内容を分かりやすく伝えるノウハウや対象者の客観的な視点を得られてとてもためになりました。”など、出前講座で活用されることを意識して資料作成に取り組むことで、知識が再体制化されたことを示す回答が多く挙げられた。また、“グループでのスライド作りでは最初はストレス・マネジメントについてあまりよく理解できていなかったけれど

も、グループでの活動の中で調べお互いに聞き合いながらやることで理解に繋がったと思います。”や“出前講座のスライドをグループで作成したことがとても勉強になったし楽しかった。それぞれのグループで個性が出て面白かった。”など、協働学習を通して、学習意欲が高まったことや理解が深まったことを示す回答もみられた。一方で、少数ではあるが、グループ分けや成績評価に関する不満や授業意図の不明瞭さに関する指摘もあった。

Table 1 講義及び出前講座に関する自由記述の内容 1

講義のみ群の自由記述
・講義は例を挙げられたりしてより想像しやすく、わかりやすいものになっていたと思います。出前講座には参加しませんでした。スライドを作成する際、ストレスや認知再構成法など改めて自分で学び、今まで知識を得るだけだったのを、発信という形に変えることがとても難しく、考えていくことでより自分の学びに繋がったと思います。
・今まで習った理論をどのように伝えればわかりやすく届くのかということ時間をかけて考えることができ、自分自身のより深い学びにつながったように思います。また、今回の対象が中学生ということで中学生にあわせたプレゼンの仕方を考える時間も長く、伝えたい対象によって何をどう変えなければならないかということを検討する良い機会にもなりました。
・自分たちで心理教育についてのスライドを作成することによって、ストレスについて改めて自分たちが調べ、ストレスに関する知見を整理することに役立ちました。また、人に伝えることの難しさを同時に実感し、今後の活動に生かしていけたらと感じています。
・中学生を対象とした発表資料の作成を通じて、ストレスについて理解した上で、さらにわかりやすく変換していく作業から、さらに自分自身の理解も深まったように思う。
・心理教育に特化した授業を受けたことがなかったので、生徒にとってどうやったら面白く（心を掴むような）分かりやすい授業を作れるか考えて、スライドや授業計画を作成すること、そして生徒の視点に立って他の発表者の授業を見て評価することで、必要な内容をわかりやすく伝えるノウハウや対象者の客観的な視点を得られてとてもためになりました。
・スライドについて自分ができている理解はまだまだであることに気づけた。今回の学びを通して学生か成人を問わず一般向けに説明をすることの難しさを感じた。
・授業者側としてスライドを作成し、発表する経験はあまり無かったので良い経験になりました。出前講座当日に予定が合わず行けなかったことが残念であった。当日の様子のビデオがあれば鑑賞したい。
・グループでのスライド作りでは最初はストレスマネジメントについてあまりよく理解できていなかったけれども、グループでの活動の中で調べお互いに聞き合いながらやることで理解に繋がったと思います。グループメンバーとのコミュニケーションも大切だと思いました。
・出前講座のスライドをグループで作成したことがとても勉強になったし楽しかった。それぞれのグループで個性が出て面白かった。
・「一般の方（中学生）を対象に心理教育を行うためには？」という視点でグループ活動ができたことは、自分がこれら先に心理教育を行うかもしれないという点では練習になったとは思いますが。しかしこの講義でやることなのかについては疑問は残った。
・そもそも知識や理解がなかったので、パワポを作るにも材料が少なく苦戦したなあと思います。グループによっては人間関係が大変そうなどころもあって、グループ分けって大事だなと思いました。グループで集まって、というのはめんどろな部分が多かったですが、いろんな知識やアイデアを持ち寄って、発表は楽しくできたので、結果的には良かったなあと思います。
・出前講座に向けてグループでプレゼンを考えるとき、説明や指示が結構あいまいだったなあと感じました。あと個人的に気になるのは評価ですが、同じプレゼンを作っているそのグループの中でまた頑張り度が違うかと。
・忙しかったというのは言い訳だが、やっつけて完成させたようになってしまったと思う。だからこの授業で理解が深まったとは思わなかった。

出前講座のみ群や講義と出前講座群 (Table 2) では、“出前講座では、「ポジティブに考えられるようになることを目指す」のではなく「他の考え方がないか探さただけで楽になれるよね！」という一番大事な所がPTAの方にも生徒にも先生方にも伝わっていたようで、(中略) 成功だ—と思って自分が嬉しくなった。”、“実際に講座に参加してみて中学生の意見が聞いて良かった。”、“中学生の中に入って活動するときに積極的に入っていき、初対面の相手集団の中に入ってやり取りをするのが難しいと改めて実感しました。ファシリテートの技術が必要だと思いました。”など、中学生や保護者の反応や意見に関する肯定的感情や考察、自身の関わり方やファシリテーションに関する反省が回答として得られた。また、“実際の中学生の反応を見て、面白い考えをしている子もいて、とても興味深

いと感じました”という感想から、「支援者」側の大学院生が、出前講座の「受け手」である子どもから学びを得ている様子も伺えた。このことは、宮崎（2015 pp127）が指摘する循環型教育の定義や効果⁴⁾と一致するものであり、本取り組みが循環型教育として機能していたことの根拠の一つといえるだろう。

Table 2 講義及び出前講座に関する自由記述の内容 2

出前講座のみ群の自由記述
<p>・中学生の中に入って活動するときに積極的に入っていき、初対面の相手集団の中に入ってやり取りをするのが難しいと改めて実感しました。ファシリテートの技術が必要だと思いました。興味が魅かれるようなスライドをどうやったら作れるのだろうと思いました。スライドの作り方によっても面白いかどうか分かれると思いました。</p>
<p>・人間は1つのことに注意が向くとそのことにとらわれてしまいやすくうまく切り替えができなくなることを改めて学びました。その中で認知再構成は認知を柔軟にすることを通して前向きになれるためとてもいいものだと思います。そういったことを上手に臨床に応用していけるセラピストになりたいと思いました。</p>
講義と出前講座群の自由記述
<p>・ストレス理論から知識が足りなくて焦ったが、他のメンバーから色々なことを教わりながら、中学生向きの内容を構成していくことができ、自分自身がかなり勉強になった。特に難しいと坎じたのは、どこまでの知識を中学生に教えたら、スッと入ってくれるのか？それをどのようにスライドに表現したらわかりやすいか？興味を持ってくれるか？という所だった。中学生の実態もイマイチ分からなかったため、どこまでのラインが理解できて、どこからシーンとなってしまうのかという部分が分からず、作成に非常に時間がかかった。出前講座では、「ポジティブに考えられるようになることを目指す」のではなく「他の考え方がないか探すだけで楽になれるよね！」という一番大事な所がPTAの方にも生徒にも先生方にも伝わっていたようで、(中略)成功だ一と思っ自分嬉しくなった。学校ではやはり教科教育がメインなので自分が楽になれるような生き方を教わる、このような機会は貴重だし、大切だと感じた。自分の将来、こういう風に少しでも子どもたちと関わってあげたいと思っていたが、全然うまくサポートができず、落ち込んだ。</p>
<p>・授業はグループワークということで、グループの中で負担に偏りが出ている。出前講座は中学生と触れ合えて、実際はこんな感じなのだというのがわかり勉強になりました。先生の講座も楽しめたのでよかったです。</p>
<p>・実際に講座に参加してみて中学生の意見が聞いて良かった。資料づくりも楽しんでやれた。グループワークの時間により関わりを持てたら良かったと思う。全体的にとっても有意義で出前講座も参加して良かった。</p>
<p>・ストレス理論や認知再構成法についてただ知識として持っているだけでなく、中学生に伝えるにはどうしたらいいか考えることでどう活用すればいいのかという点を深められたと思います。出前講座にも参加してみて、実際の中学生の反応を見て、面白い考えをしている子もいて、とても興味深いと感じました。ただ、中には感想に「前向きな考えをするのは難しい」と書いていた子がいたり、同じ話を聞いてもとらえ方は様々なんだと改めて思いました。理論を活用するときには、どう分かりやすく伝えるかはもちろんですが、どう誤解を与えないように伝えるかも大事だと思います。</p>

以上の結果から、本研究での取り組みは、大学院生の臨床心理学教育として、一定の効果を示したと考えられる。自由記述の結果から、実践での活用を意識して資料作成に取り組んだこと、グループでの協働学習であったこと、ファシリテーターとして出前講座に参加したこと、中学生や保護者からのフィードバックを得られたことなどの要因が、教育効果を促進する要因となっていたことが推測できる。近年、スクールカウンセラーの役割として、教員と連携して授業で心理教育を実施することが求められており、そのためのスクールカウンセラーの資質向上が課題として指摘されている⁶⁾。本研究の成果は、大学院教育において、心理教育の方法論を実践的に教授する際の一つのモデルとなりうる。

一方で、当取り組みを通して、授業改善のための課題も散見された。第一に、授業意図が十分に伝わっていなかった学生が見られたため、オリエンテーション時に授業意図や心理教育が心理臨床家の役割の一つであることの説明をより丁寧に行う必要があるだろう。第二に、グループワークに関しても否定的な意見が少数見られたため、グループ評価の方法やグループ分けについても今後、検討していく必要がある。また、出前講座での学びをより高めるために、ファシリテーションのためのガイダンスを行う必要があると考えられる。最後に、本研究の限界点として、本研究ではアンケート調査から教育効果の検討を行ったが、結果に調査対象者の社会的望ましさや調査者の要求特性が影響した可能性は否定できない。今後は、参加者の知識や技能の向上について、より客観的な指標を用いて評価することが期待される。第二に、本研究の結果は、少数の対象者の回答をもとにした予備的知見である。今後も継続してデータを蓄積し、統計的な差を検討する必要があるだろう。最後に、循環型教育の成果を明らかにするためには、出前講座の受け手である生徒や保護者、教員の反応や変化も包括的に検討していくことも必要であるだろう。

引用文献

- (1) 宮崎 冴子 (2015). 循環型教育——学校・家庭・地域社会にイノベーションを—— 文化書房博文社
- (2) 村岡 則子・佐藤 快信・占部 尊士・折原 重光・矢野 忠 (2016). 臨床と教育の協働による医療ソーシャルワーカー養成の実践：循環型教育モデルの構築と初歩的検討 医療ソーシャルワーク研究, 6, 52-58.
- (3) 眞鍋 えみ子・倉ヶ市 絵美佳・橋元 春美・今村 浪子 (2011). 教育と臨床の協働による看護実践能力向上への取り組み——循環型教育システムによる看護師育成プランの紹介（特集 看護実践能力向上のためのストラテジー）—— 京都府立医科大学雑誌, 120, 793-800.
- (4) 明治学院大学心理学部教育GP推進室 (2010). 心理支援論：心理学教育の新スタンダード——コミュニティ資源を活用した体験活動および循環型教育システムの導入と評価—— 明治学院大学心理学部
- (5) 下山 晴彦・屋嘉比 光子・西村 詩織・平林 恵美・林 潤一郎 (2009). 子どものための認知行動療法プログラムの開発研究 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 163-184.
- (6) 石倉 篤・中田 行重 (2016). 学校の授業におけるスクールカウンセラーが行う心理教育の今日的課題 関西大学心理臨床センター紀要, 7, 57-66.

Circulative education for graduate students in clinical psychology

Keisuke TANAKA * · Toshie MIYASHITA *

ABSTRACT

Circulative education is defined an interactive learning process between instructors and learners. Circulative education at school site is expected to provide a rich opportunity to experience involvements with students. Recently, there is a need for school counselors to give a psychological education for school children in Japan. Thus, the principal aim of this study was to examine the effect of circulative education at school site for graduate students of clinical psychology. Twenty three students participated in the seminar for projecting psychological education programs. Four students out of 23 also participated in a psychological education program at school. Two students only participated in a psychological education program at school. As a result, 70 percent of participants reported a positive impression for the seminar and the participation in a psychological education program. Students who participated in a psychological education program at school reported more positive impression than students who did not participate. Future issues of circulative education in a clinical psychology education were discussed.

KEY WORDS

circulative education, clinical psychology, psychological education, school counseling